

WING FAMILY 新翼の家族

小説：羽沢向一

表紙イラスト：みかほ

試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ウイングファミリー』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



WING FAMILY
WING FAMILY

W

羽沢向一
表紙／みかん。

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

しらとり はづき

白鳥羽月

豊満な肉体を持つ未亡人。白いレオタードを身につけ、ウィングファミリーのリーダー・スワンとして活躍する。

しらとり かもめ

白鳥 鷗

羽月の娘。母譲りの超能力に目覚めたばかりの、健康的で活発な少女。

少年

謎のロボット軍団に追われていたところを羽月に助けられた少年。

キュン。と、頭の中で桃色の警報が鳴る。

「んっ！」

白鳥羽月は思わず口につけたコーヒーカップを震わせ、ブラックの液体を数滴テーブルにこぼした。

「うくっ！」

白鳥鷗はたまらず啞えたストローに熱い息を吹き込み、メロンソーダをぶくぶくと泡立たせる。

「ふう……」

「んん……」

母娘はまた同時に声と息が入り混じった喘ぎを口から吐き、両肩をびくつとすくめた。二人そろって、頬がわずかに朱に染まる。

「くっ……やだなあ、母さん。こんなところで起きちゃうなんて」

「恥ずかしいけれど、しかたないわ。鷗ちゃん」

母娘は銀座の晴海通りに面する喫茶店の、四人がけのテーブルに向かいあつて座っているのだ。周囲の客、特に男たちの注目が、自分たちに集まっているのではと思うと、羞恥でいよいよ顔が赤くなる。

「これは近くで、なにかの危険があるという警報なのよ。少しだけがまんして、ああ……」

「いよいよボクもデビューできるんだ、はうっ……」

鷗と羽月は囁き交わしながら、眉をよせて、苦しげに吐息を洩らした。

二人の脳の奥でチリチリと危険信号が鳴りつづける。警告の響きは神経を伝わり、肉体のそこかしこを熱していく。胸が張りを増して、四つの乳首が硬くなりはじめた。腰の奥も、じりじりと疼きだしている。

こらえようとする意思に反して、つい悩ましい声音が口から溢れてしまう。

たとえ黙って座っていても、よく目立つ二人だった。

羽月は三十六歳。女性弁護士か大病院の女医をイメージさせる知的で硬質な美貌が、ていねいにまとめた艶やかな黒髪によく映えている。

一見男を敬遠させる顔つきだが、落ち着いたダークブルーのツーピースの胸は豊かに盛り上がり、ウェストは気持ちよく引き締まっていた。そして、たっぷりと量感のあるまろやかな尻が、無意識のうちに火であぶられているように椅子の上でくねっている。

鷗は十代後半。若さをはじけるボーイッシュな美少女だ。ピクンピクンと背筋が震えるたびに、自分で無造作に切ったような短髪がつんつんと四方八方へ跳ねる。

ノースリーブのシャツとデニムのショートパンツからのびる手足は、ほどよく日焼けして、しなやかな猫科の獣を思わせた。まだ子供らしさが残る体型だが、熱い吐息とともに上下する胸は、未来の成長を期待させるふくらみを見せている。

二人は身体の内側からの熱に責め立てられながら、そつと店内に目を配った。

「はあ、母さん、店の中はなにもないみたいだ」

「そうね。うっんっ、店の外を調べてみましょう」

「そんなあ。これ以上がまんしたら、ボクはおかしくなっちゃう」

文句を言いながらも、鴎は股間を刺激しないように注意して、椅子から立ち上がった。その間にも、身体を侵食する熱い疼きは激しさを増す。ショートパンツの中で、パンティがしつとりと湿りはじめた。

羽月も状態は変わらない。ただでさえ窮屈な胸が動くたびにブラジャーにこすれて、たまらない快感を生む。母親である自分だけでなく娘まで、衆人環視の中で淫らな欲求に責められている。身悶えして耐えねばならない状況に、羽月は情けなくてしかたなかった。娘をこんな身体に生んだのは、自分なのだから。

（鴎は能力が目覚めたばかりだから、まだ身体が慣れていない。わたし以上にっらいはずだわ。わたしがしつかりしなくては）

娘の身を案じながらも、羽月が主婦の経済感覚で残ったコーヒーをひと息に飲み干した。カップを皿に置こうとしたとき、空気がビリビリと震動した。喫茶店の壁と天井が大きく揺らぐ。

「地震？ 警告は地震だったの？」

はいけないわ)

どれほど自分を叱っても、いながらも薰る男の体臭に、未亡人の理性が魅せられる。まだやわらかい少年の筋肉の感触に密着されていると、スーパーヒロインの義務感が蕩けかける。

(だめ。だめだめだめ)

「夫を失って、ずいぶんと欲求不満みたいだね、羽月姉さん」

冷たい声が鼓膜を打った。同時に低い震動音が響く。

「なに？ ひっ！ ああひいひいひいひいっ!!」

羽月の全身の表面を、音が被った。音、つまり空気の震動が敏感な乳房や股間を絶妙に震わせ、まるでパイプのような愛撫をしてくる。

「羽月姉さんが、ぼくにひかれるのも無理はないよ。だって、ぼくの身体からは、羽月姉さんだけを誘惑する物質が出ているんだもんね」

「ど、どうして、あふっ、いい、いいっ、ううあああ……」

焦らされ続けてきた肉体は、想像したこともない刺激に襲撃され、たちまち羽月のコントロールをはずれた。いつもはおだやかな指の愛撫でじつくりと進む官能が、一瞬で頂点に達した。

「あ、はああ、こ、こんな、んううっ、だめ、だめえっ、イッチャう、イクうっ！」



少年に抱かれたまま膝立ちになった羽月の腰が、前後にガクガクと揺れた。汗で透けたレオタードの股間の布の左右から、どっと愛液が溢れ出る。

「羽月姉さんのテレキネシス・フィールドは危険には反応するけど、快楽には反応しないんだよね。姉さんがいやらしいから、せつかくの超能力も使えなくなっちゃうのさ」

「あああ、止まらない、止まらないわ、はんん、あおおお……」

一度絶頂に達して過敏になった羽月の身体が、休むことなく空気の震動に嬲り続けられた。身体がばらばらになりそうな悦楽の嵐の中で、少年の笑い声が耳に侵入してくる。

「姉さんと呼んでいいよね。血はつながっていないけど、羽月さんとぼくとは同じ巢で生まれた雛鳥なんだから」

「あ、んん、き、きみも、あいつらに、はひっ、身体を、あぐうう！」

「そうだよ。ぼくも羽月さんと同じダークネストに改造されて、特別な力をもらった闇の雛ダークブルード鳥だよ。ぼくのコードネームはラプソディ。能力は音をあやつることさ。この部屋は完全防音にしたから、どれだけよがり声を上げても、鷗さんには聞こえないよ。安心して何度でもイッチャっていいからね」

「そんな、ああおううっうう！」

レオタードを突き破らんばかりにしこり立った乳首を、音が前後左右に震わせ、採みだてる。空気の震動は白い布を透過して、勃起しきったクリトリスを嬲りつくす。

陵辱の音波は秘唇を押し開き、濡れそぼった肉襞を小刻みに震わせ、膣の粘膜を揺るがして、子宮の奥まで到達した。

「きひっ、ひい、また、またイッチャウウ！ ひあああっ!!」

身体の奥で嵐が吹き荒れるような未知の責めに、羽月は息つく間もなく、たてつづけに絶頂を迎えさせられた。

「お、おおう、も、もう、やめて、死んじゃう、ひい、イク！ イクっ！ イクイクイク
うう!!」

羽月は少年から逃れようと、両手で突き飛ばそうとしたが、逆に手首を取られてしまう。神経も筋肉も快感に痺れて、超能力だけでなく、憎むべきダーククネストから与えられた強靱な腕力を振るうこともできなかつた。無限絶頂地獄に墮とされ、全身の自由もままならない。

両目から涙が落ち、口からよだれが垂れ、ぶるぶると揺れる胸をべとべとに濡らした。淫猥なダンスをくりかえす腰のレオタードは、女蜜でぐしょ濡れだ。完全に透明になって、大きく開いた秘肉と屹立したクリトリスの形をくつきりと露見している。布に吸収しきれない愛液が乱れ飛び、周囲の床に甘い水たまりを造っていた。

「はぎいいいいい……………」

ついに羽月は声にならないうめきを発し、床に倒れて腹ばいになった。意識こそあるが、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>